

追悼の言葉。

去る三月十六日にご逝去されました故小坂眞三議員に対しまして、荒川区議会を代表し、謹んで追悼の言葉をささげさせていただきます。

小坂さんとお別れがこんなに突然やって来るとは、私だけでなく議会の誰一人として思いもよらなかったと思います。

荒川区の来年度の予算を審議する予算特別委員会が始まり、この大事な委員会の委員長を小坂さんに努めてもらい、その初日が二月二十五日でした。ベテランの小坂さんらしく、初日の委員会を手堅く進行していただきました。これから八日間続く予算特別委員会もこの調子で順調に進むなと思っていましたら、翌日、委員会二日目の早朝に奥さまから、小坂さんが緊急入院したことを知らされました。それでも、その後小坂さんとも電話で話ができ、二週間ぐらいで退院できるという様子を聞いて二月会議期間中には議会に復帰できるものと思っていました。

その後検査の結果、入院が少し長引くと聞きましたが、三月十六日の夜、突然小坂さんが亡くなったという知らせを受けたときは、驚いたというより、事態を把握出来ず、しばらく茫然としてしまいました。

私が小坂さんと初めて会ったのは三十数年前、小坂さんが衆議院議員天野公義先生の秘書をしている時でした。厳しい選挙をともに戦ったなかで、同志的なつながりが生まれたのだと思います。

その後、平成3年に荒川区議会議員に当選され、以来議会活動はもちろん、議会以外でもいつも一緒に行動してきました。小坂さんとの思い出は、あれから一か月経ちましたが次々に思い出されています。

議会での思い出の一つに、小坂さんが議会運営委員長として北海道の白老町に通年議会を視察しに行った際の経験があります。

この視察が、その後荒川区が全国の地方自治体の先頭を切って通年議会を導入した先鞭になったことは間違いありません。また平成4年には超党派の議員十三名で北朝鮮を視察しましたが、その仲間も今では三名になってしまいました。

小坂さんは、平成24年に荒川区議会議長に、また22年には荒川区監査委員を務めました。平成30年に、荒川区議会永年議員表彰（25年在職）を受けました。また、東京都23区の自民党区議会議員、幹事長連絡会の会長という、荒川区の区議団では初めての役職も経験されました。こうした経験と、小坂さんの誰とでも分け隔てなく接する気さくさもあって、荒川区以外にも大変多くの友人がいまし

た。

小坂さんが区議会でやり残したことを、特に日暮里地区の問題などたくさんあり、志半ばで逝くことは心残りだと思います。これからは、そうした小坂さんの遺志を私たちがしっかりと受け継いでいくことをお誓い申し上げます。

ここに、議員一同を代表して深く哀悼の意を表しますとともに、心からご冥福をお祈り申し上げ、お別れの言葉といたします。

令和二年四月二十七日、区議会代表 志村博司